陳曼寿と日本の漢詩人との交流について

日野俊彦

はじめに

明治十年代に来日した陳曼寿（一八二五～一八八四）は、日本で最初に中国人によって編纂された漢詩集『日本同人詩選』の編纂者である。陳曼寿については、これまで王宝平・蔡毅・陳捷による研究がある。[1] ただ、陳曼寿と日本の漢詩人たちとの交流については、これまでの研究を補うべき部分があろうかと考える。本稿では、日本の漢詩人たちがどのように陳曼寿と接したかを示すことを目的とする。

一－一　陳曼寿について

陳曼寿については、現在よく知られている人物とはいえない。このため、王宝平による略伝の一部を示し、併せて補注を行う。文中の（　）は、王宝平による補注である。

字は味梅、曼寿を号とする。別号に乃亨翁、寿道人などが見られる。秀水（現、浙江省嘉興）の人、豊かな家に生まれ、幼時から父の薫陶を受け、同好との詩文のやり取りは毎日のように行われていたという。〈中略〉咸豊五年（安政二年、一八五五）父を亡くし、太平軍に故郷を陥されてから、生計が衰退の一途をたどっていった。〈中略〉同治十年（明治四年、一八七一）貢士になったが、生計が立たず、転々と他郷を流浪する生活をよぎなくされた。長く上海に客寓し、王冶梅や胡公寿などの名流とも懇意であった。書道は冬心に倣い、書いた篆書・隷書には古趣があり、また冬心を模倣した梅の絵には、かすれた筆致で特別の趣を出している、という。生計上の理由と友人の影響を受けて、早くから来日を待ち望んでいたらしい。〈中略〉光緒六年（明治十三年、一八八〇）、衛鋳生の斡旋でいよいよ来日できるようになった。〈中略〉この年の三月一日（太陽暦、四月九日）、五十六歳の彼は船に乗って長崎、神戸を経由して京都にたどり着き、暁翠楼に客寓した。そして、二年後の光緒八年四月二十五日（明治十五年、一八八二年六月八日）ごろ帰国した。[2]

まず、王宝平は陳曼寿を貢士、すなわち会試（中央試験）に合格し、まだ殿試（皇帝の面前で行われる、最終試験）を受験しない人とす

る。しかし、陳の「乃亨翁歌」詩の自注では「余於辛未出貢（余、辛未に出貢す）」とある。「出貢」とは、何度も科挙の試験を受けて落第したものを、年齢や資質に応じて順番に北京へ送ったもの。辛未とは、吏部が下級官僚として職務を選び、任命し、その任務に就く順番に当たった年である。このことから考えると、陳曼寿は貢士のような官僚級ではなく、万年落第者への救済措置を受けて、ようやく下級官僚となったのである。しかも、辛未は同治十年（一八七一）であり、蔡毅は陳曼寿の生年を一八二五年とするので、四十七歳とのこととなる。王冶梅は陳より先に来日した文人画家で、陳が日本で刊行した自分の詩集、『味梅華館詩鈔』の口絵を描いている。暁翠楼は『味梅華館詩鈔』を刊行した、京都にあった原田隆造（号は西疇）の書斎名。原田は明治九年頃まで工部省電信寮に勤めた後、日本赤十字社の前身である博愛社創立に係わった人物である。

王宝平の略伝から伺えるように、陳曼寿は太平天国の乱により、おそらく家財や所有していた土地を失い、官吏となることもかなわず、各地の名士に取り入っては自分の書画を売って生活の糧とするような不安定な生活を送っていたようである。陳の「乃亨翁歌」詩は、古詩の形式で書かれた、言わば自叙伝であり、来日して三か月後には日本の漢詩文雑誌「新文詩」に掲載されている。[3] 日本の漢詩人たちは、この詩によって陳曼寿がどのような人物であるかを知ったに違いない。ただ、八十八句に及ぶ長く、様々な典故を織り込んだ詩を読み手が全て読み解けたとは限らず、この詩への小野湖山・森春濤による評語[4]が、詩の理解への補い、感想となっている。

余、曩（さき）に西京に在りて、曼寿と邂逅す。一見して、其の為人（ひととなり）を偉とす。今、此の篇を読むに、其の平生閲歴を詳らかにし、益（ますます）其の人を愛す。而して深く其の不遇を慨するなり。（小野湖山の評）

半生の閲歴、了了として目に在り。詩人の窮、千古一の如し。余輩も亦た病を同じくせざるを得ず。相憐れむなり。（森春濤の評）

「深く其の不遇を慨するなり」「詩人の窮、千古一の如し。余輩も亦た病を同じくせざるを得ず。相憐れむなり」との評語によって、読み手は詩人の境遇を理解し、多くは陳曼寿が自分たちと同じように、かつての身分を失い、今は貧窮の生活を送っていることに共感をしたのであろう。延いては陳曼寿の来日の目的が、その困窮をどうにかして切り抜けようとすることであるのに気づいたはずである。困窮の内にあることは日本の多くの漢詩人たちも同様であり、各地の名家を訪ねては詩の添削、揮毫を行い、その報酬を生活の糧としていた。はるばる日本にまで来て、生活の糧を得ようとする陳曼寿に対して強い同情をしたに違いない。

また、日本では陳曼寿がかつて高位の官僚と認識していた可能性がある。明治十三年七月十五日の大阪朝日新聞には次のような記事がある。[5]

清国浙西の陳曼寿氏は明経と呼ばれ、最も詩文を能くし、篆隷彫刻にも巧に、曽て翰林院待詔五品官たりしが、頃ろ西京姉小路上る麩屋町俵屋に止宿。諸名士と応酬。（後略）

明経は貢生（地方から選抜されて、中央政府に推薦されたもの）の敬称であり、陳曼寿もそう称される資格を持つ。しかし、彼が赴任した翰林院待詔は、宮中の文書の書写や校正を行う役職、しかも官位は最下級の従九品であり、記事のような五品官ではなかった。この記事が単なる誤解か、意図して作られたものかは判然としないが、人々の陳曼寿への接する姿勢に影響を及ぼしたことは考えられる。

当時、諸外国に関する情報量・伝達方法は限られたものであった。陳曼寿についても、多少虚実の入り交じった形で日本の漢詩人たちは陳曼寿を見ていたとしても、致し方のないところがあろう。

一―二　湖山の見た陳曼寿

春濤は陳曼寿と直に接することはなかったが、湖山は評語にも見えるように、京都で陳曼寿と対面をしている。また、『味梅華館詩鈔』の序文の代わりとして手紙を寄せるなど、関係が深い。その一端を湖山の「庚辰帰展日録」から見る。

湖山は明治十三年四月七日から五月十日にかけて、滋賀県長浜市にある両親の墓と、京都にある梁川星巌の墓の墓参りを行い、その記録を「庚辰帰展日録」として残している。この日録は後に湖山の詩集、『湖山消閑集』（明治十四年一月刊）の附録として収録されている。[6] その中から陳曼寿に関する部分を抜き出す。

明治十三年四月二十三日条　舎主（日野補注　湖山が宿泊した俵屋の主人）、余に語りて曰く「支那の客有り。別楼に在り。曰く陳曼寿。曰く衛鋳生。余乃ち之に見えるに、原田西疇座に在りて、介を為す。鋳生は数月前東京に在りて、数見ゆ。一別して以て天涯と為すに、今日復た邂逅す。実に奇縁為り。曼寿、袖中を探し、岸吟香の上海自り余に寄する書を出して、且つ曰く「弟は葉松石家に於いて、蓮塘唱和（補注『蓮塘唱和集』は、湖山らが不忍池の蓮を観賞し、詠んだ詩の詩集。明治六年八月刊）を読む。早に名を記すなり」と。亦た奇遇なり。曼寿の為人、清癯沈静にして、尋常の漫遊の士に非ざるなり。

同月二十六日条　午後、会して宮川坊不老亭に飲む。（中略）清人陳・衛二子を邀ふ。（後略）

同月二十七日条　陳・衛二子に見ゆ。衛は病酲むるも起つ能はず。陳は方に俛焉として細字を書す。余、之を煩はすを欲せず。乃ち去る。西疇来りて曰く「将に陳氏の詩抄を刊せんとす。余、為に之を慫慂す」と。

同月二十九日条　早に起ちて京を発す。書を留めて、陳・衛二氏及び西疇に別る。

陳曼寿が湖山に見せた紹介文は、おそらく『朝野新聞』記載のものと同じものであったに違いない。そこには「陳生隷書ヲ善クス、篆刻最モ其所長ナリ、文事モ衛鋳生ノ右ニ在ル可シト」とあった。[7] また、湖山による陳曼寿「別滬上諸同人」詩、蔡寵九「送陳曼寿游日本」詩の評語を見ると、陳曼寿の来日以前に既に吟香から陳曼寿について紹介があった。[8]

友人岸田吟香、支那上海に滞在し、書を春翁に寄せる中に「陳・蔡数子の詩に曰く『陳氏の東游は近きに在り。故に先ず

寄せて之を示す』」と有り。吁天涯の比隣、文士の往来も亦た是れ昭代の化なり。其の事喜ぶべし。其の人企望すべし。（陳曼寿「別滬上諸同人」＊春翁は森春濤。企望は強く望むこと。陳氏の来遊已に定む。若し蔡氏をして亦た継ぎて至らしめば、則ち亦た一段の佳話を添うなり。（蔡寵九「送陳曼寿游日本」）

吟香の紹介状を読み、更に直に接したとき、湖山は陳曼寿に対して深い敬意を抱くようになった。これは陳曼寿が『味梅華館詩鈔』の序文を湖山に請願した手紙、「与湖山先生（湖山先生に与う）」への湖山の評語にも伺える。(9)

近者、西京に在りて、陳子の逆旅に邂逅す。匆卒の間と雖も、深く其の為人に服し、而して其の言の謙抑此の如し。人をして慚汗湿背せしむ。

人柄のみではなく、謙遜の思いが見える言動にも、湖山は感服している。その人柄についても、「清癯沈静にして、尋常の漫遊の士に非ざるなり」と評している。「清癯」は「すっきりとした細さ」であり、詩語としては梅や竹に用いられる。梅は冬の苦寒に耐えながら、美しい花を咲かせ、竹も風雨の厳しさに耐えながら、緑を維持する。蘭・竹・梅・菊を「四君子」として称えることを踏まえれば、湖山の「清癯沈静」には、陳曼寿は礼節を備え、苦境にも動じない人物とする意識が読み取れよう。また、明の高啓「青邱子歌」の冒頭、「青邱子臞而清、本是五雲閣下之仙卿（青邱子は臞にして清し。本と是れ五雲閣下の仙卿なり。臞は癯の異体字。五雲閣下は五色の瑞雲がたなびく楼閣。仙卿は仙界の長官）」を思い起こし、高啓のような孤高の文人の姿を陳曼寿に重ね合わせたであろう。湖山の陳曼寿を好ましく見るさまは、「俛焉として細字を書す」と、依頼の書をコツコツとひたむきに書く姿にも表れている。湖山のみではなく、陳曼寿が滞在した京都・大阪の詩人たちも同様の思いを抱いたからこそ、次章で示すような陳曼寿に対する篤い支援が生まれたのである。

二　陳曼寿の来日前後の足取り、漢詩人たちとの交流

陳曼寿の来日前後の足取りをまとめると、概ね次のようになる。

・明治十年七月、上海滞在中の副島種臣に会う。「謝副島種臣恵日本橘」詩（『味梅華館詩鈔』巻二所収）はこの頃の作か。「平安堂旧蔵王冶梅・毛祥麟・陳曼寿・斉玉渓寄書まくり」について、所有する古書肆は「上海滞在中の副島種臣の求めに応じて明治10年7月18日に書かれたもの」と説明する（実物は未見）。

・十三年三月、『新文詩』第五十九集に陳の「別滬上諸同人」詩、蔡寵九「送陳曼寿游日本」詩が載る。同集末尾に附された「作家姓氏」には「曼寿　陳鴻誥　清国蘇州人」とある。

・同年四月、高砂丸（郵便汽船三菱会社のスクリュー船。横浜―神戸―下関―長崎―上海間を航行した）に乗り、長崎、神戸を経て、京都に着く。「乗禿格薩谷輪船、赴日本。用進退格」詩、「由長崎至神戸。舟中看一路山景」詩、「三月十一日、与鋳老・兪杏生・

朱季方同遊諏訪山、於酒楼小飲。賦此紀事」詩（いずれも『味梅華館詩鈔』巻二所収）。諏訪山は兵庫県神戸市中央区諏訪山町。小野湖山、京都の俵屋に宿泊する陳曼寿と会う。

・同年五月、『新文詩』第六十二集に陳の書簡「与湖山先生」が載る。

・同年七月、『新文詩』第六十四集に「乃亨翁歌」詩が載る。

・同年七月十五日、『大阪朝日新聞』の記事に「清国浙西の陳曼寿氏は明経と呼ばれ、最も詩文を能くし、篆隷彫刻にも巧に、曾て翰林院待詔五品官たりしが、頃ろ西京姉小路上る麩屋町俵屋に止宿。諸名士と応酬。（後略）」とある。

・同年八月、『味梅華館詩鈔』刊行（奥付には明治十三年七月廿七日出版御届／仝　八月刻成とある）。

・同年九月二十日、『大阪朝日新聞』の記事に「府下川口自由亭に寄留する支那人陳曼寿は揮毫に其妙を得て居れば、日々同氏の門に書を乞ふ者陸続たりと」とある。自由亭は、明治元年の大阪開港と同時に、大阪市西区川口付近に設けられた外国人居留地（旧川口居留地）にあったホテル。

・明治十四年一月、『新文詩』第七十集に「謁楠公祠」詩が載る。

・同年四月、石橋雲来編『雲来吟交詩』第三集刊行（陳曼寿の詩三首を含む）。

・同年五月～六月、『新文詩』第七十四集に「嵐山看桜花。用昌黎山石韻」詩が載る。

・同年七月八日～十日。陳と福原周峰・土屋鳳洲が筆談を交わす。その記録を同年十月に土屋が『邂逅筆語』として出版する。

・十五年四月二十三日、『大阪朝日新聞』の記事に「風流家の聞ある旧奈良県令藤井千尋君が発起にて、来月六日七日の両日を卜し、和州法隆寺村に於て書画展覧大会を催され、山中信天・谷如意・頼支峰・江馬天江・神山鳳陽・清人陳曼寿等の諸先生も来会して席上揮毫あり。又法隆寺の宝物縦覧ともさせらるるよしなり」とある。

・十五年中、一時帰国か。同年春に『日本同人詩選』凡例を、冬に土屋弘（鳳洲）『晩晴楼文鈔』序文を執筆する。陳曼寿は土屋の詩文集『晩晴楼詩鈔』『晩晴楼文鈔』の評者の一人にもなっている。

・同年五月、『新文詩』第八十三集に「游養老山観瀑」詩が載る。

・明治十六年三月、『日本同人詩選』刊行（出版人は土屋弘。当時の土屋は大阪府一等教諭兼堺師範学校長）

・同年五月～六月、『新文詩』第九十四集に陳の「湖山先生寄七十自寿二律索和即次原韻」詩が載る。

・同年九月以前、土屋「次陳曼寿所寄詩韻、送其帰清国」詩（『晩晴楼詩鈔』巻二所収）あり。「癸未之夏、築家塾及小楼……以示生徒」の後、「九月十五日夜……飲于海楼」の前に配列されている。

・同年十一月?、土屋弘の妻の祖母の三回忌、明治十二年七月と明治十四年九月?に亡くなった土屋弘の子供への追悼のために『追思編』を刊行（藤田守による編集・刊行。私家版）。陳曼寿は土

屋の「外家藤田太孺人墓表」に評語を付し、「光緒七年歳末次辛巳孟冬、於麋城客館、得弘毅先生手書。知有喪女之痛、賦此唁之（光緒七年歳末次辛巳の孟冬、麋城（びじょう）の客館に於いて、弘毅先生の手書を得。喪女の痛有るを知りて、此を賦して之を唁（とむら）ふ）」と題する七絶二首を寄せている。麋城は大垣城の別名。

・明治十七年二月、水越成章編『翰墨因縁』刊行（陳曼寿の詩七首を含む）。

・同年三月以降、土屋「聞陳曼寿病歿、賦之遙奠」詩（『晩晴楼詩鈔』巻二所収）。「甲申三月念三日……余得翹」詩の後に配列されている。

・同年五月六日、『大阪朝日新聞』の記事に「久しく我邦に渡りて当川口に寄寓し、文士の間に其名を知られたる清国人陳曼寿は、去秋帰国してのち病気に罹り、本年二月十八日終に鬼籍に上りし由」とある。

・明治二十年一月、湖山の詩集、『湖山楼詩』（清人兪陳二家精選とあり。兪は兪樾、陳は陳曼寿）刊行。

このように時系列で見ると、おそらく明治十三年までは原田隆造、十四年からは土屋弘が陳曼寿の支援の中心となっていたのであろう。特に『味梅花館詩鈔』が来日後わずか四か月で刊行されたこと、そこには湖山らの序文・序詩、王冶梅の口絵、江馬天江らの跋文があることから見ると、『味梅華館詩鈔』の刊行は来日以前から計画されていた可能性が高い。序跋等に姿が見えないが、岸田吟香が仲介役となって、あらかじめ原田と刊行への手順を進めていたのであろう。原田隆造は『味梅華館詩鈔』の刊行以外には、藤本鉄石の追悼会の様子を記した『薦場余録』があるのみで、彼自身の詩文集は刊行されなかった。『日本同人詩選』においても、僅か四首しか取られておらず、詩人としての才能は高くなかったようである。

また、春濤が編集・刊行をしていた『新文詩』が来日直後から陳の詩を度々掲載して、その知名度を上げようとしたことが判る。そして、小野湖山・江馬天江・福原周峰らの京都・大阪・美濃を基盤とする詩人たちによる支援も大きい。このことは京都で刊行された詞華集『雲来吟交詩』第三集所収の詩人たち、同時期に美濃で刊行された漢詩人の漢詩文雑誌『鶸笑新誌（あんしょうしんし）』所収の詩人たちの名[10]が、『日本同人詩選』に多く見えることも裏付けとなる。なお、京都については江馬天江、尾張・美濃については森春濤、または小野湖山がまとめ役となったと考えられる。このような細やかな交流が、『日本同人詩選』を編纂する基礎となっているのである。

三　『日本同人詩選』の構成について

まず、陳曼寿がどのように編纂を行ったかを、その凡例から見る。[11]

【　】内は日野による概略。

一、日本は同文の国為り。都人士は経を秉（と）り、雅を酌み、文采煥然なり。余、東土に游び、文字を以て訂交する者、其の人に乏しからず。惜しむ所は足跡の限り有りて、安くんぞ一国の詩と人とを挙

げて、偏く観て尽く識るを得ん。故に是の編は専ら相識るの人の所に就き、意を蒐輯に加う。間神交の諸君の筆札時に通ずる者も有りて、亦た編入と為す。以て他日相見るの券と作さん。

【採録の範囲の限界。面識のある人の作品を主としたこと。但し、一部には面識がないが、書簡などに記されたもの（投稿されたもの）から採ったものもあること。】

一、近来の諸家の選本日出で、名作已だ美く、収むるに勝えず。然れども声調格律に於いては、即ち近体の中にも亦た錯誤有りて、而るに古体は則ち尤も甚しき者なり。是の編の選ぶ所、皆な前人の矩矱に合わせ、縦ひ微瑕有らば、冒昧を揣らず、均しく一々酌正を為す。

【詞華集の刊行により、日々優れた作品が生まれている。しかし、平仄などにおいては、誤りがある。特に古詩においてはその誤りが多いため、中国での伝統的な古詩の平仄についての規則に基づき、手直しをしたこと。】

一、贈答の倡和諸什は、半ば酬応に属し、選に列せざるべきが似し。是の編の其の佳なる者を択びて、割愛するに忍びず。以て一時の詩筒来往の盛んなるを見す。

【（自分への）贈答の詩は、挨拶の詩という性格上、詩選に採録すべきではないが、採録して、（自分と日本の漢詩人たちとの）交流が盛んであることの証とすること。】

一、編中に登る所、僅かに一二首のみ見る者有り。因りて其の人の曽て識面すと雖も、而して未だ其の全稿を見ず。或ひは詩冊の上録に於いて之を得。或ひは友人の借りる処に於いて之を抄す。其の姓氏を存ぜんと欲すれば、詩の精粗は、姑らく置きて論ずる勿かれ。

【詩の採録については、孫引きの域を出ないところがあること。交流のあった詩人の名を記すことに留意をしたいので、詩そのものの価値については論じないこと。】

一、是の編は爵秩年齒を論ぜず、相識の先後を以て序と為す。逐時選に登らせて授梓し、嗣刻続出せん。

【詩人の配列は身分や年齢ではなく、面識の順番に拠ったこと。更に詩を選んで、続刊を出版したいこと。】

一、是の編の輯する所の詩は、悉く諸君の手抄の居に贈らるるに係わること多く、他処に録得する者有るを聞く。筆墨の餘間の匆匆なる編次なれば、魯魚亥豕免れざる所有り。尚ほ諸君の閲後の函致を望みて更に改めん。

【選んだ詩が自分宛に送られた書簡に拠るため、他書にも採録されているものがあること。慌ただしい編集・刊行のため、誤植があるかもしれず、それについては今後採録された諸子からの返信で改訂したいこと。】

壬午春日鴛湖詩老陳曼寿識す

全体を見ると、詩の選択の範囲を説明するなど、概ね穏当なものといえる。但し、第三条において、詩の応酬について記していることは注意をすべきであろう。本稿に付した「『日本同人詩選』作者一覧」に採録された詩の数、その中で陳曼寿への贈答された詩の数

を示したが、陳曼寿へ献呈した詩は目立って多いとはいえない。しかし、それを選んでもらうための追従ととられる恐れはある。第三条で言及したのは、このためであろう。むしろ、先に述べたように陳曼寿と漢詩人たちとの交流が細やかであればこそ、彼宛の詩が収録されるのは当然の結果といえる。

次に掲載詩数の順番、各巻の巻頭に誰が置かれたかについて述べたい。別表の「掲載詩数順」に見られるように、当時の漢詩壇の重鎮が多く名を連ねている。重鎮の中では江馬天江が巻一の巻頭、岡本黄石が巻四の巻頭に置かれ、陳曼寿の両者への敬意が伺える。第四位の関根痴堂は、陳曼寿と直接の接点はなく、関根が明治十三年二月に刊行した漢詩集『東京新誌』から選んでいる。東京・横浜・隅田川の風俗を詠ったこの詩集は、東京へ行くことのかなわなかった陳曼寿の気持ちを充たしたに違いない。第一位の神田信醇は、明治十年の序を持つ『夕陽紅半楼小稿』を出版しており、陳曼寿が当時の若手の漢詩人の中で特に注目したことによるか。また、第七位の村田香谷は、今日では画家として名が残る人物である。『日本同人詩選』には彼の明治九年、中国へ旅したときに作られた「丙子十月、余航海清国、与大原子亨登黄鶴楼」「将帰上海借舟、至鎮江」「大雪泊金山下」詩が収録されており、母国の風土を直に知る人として関心があったのであろう。

おわりに

これまで述べたように、日本の漢詩人たちは陳曼寿に対して、好意を以て迎えた。それは清人に対する敬意であるとともに、彼の人柄に対する敬慕、困窮への同情に基づくものである。陳曼寿が大阪・京都を拠点とできたことも、原田・土屋を始めとする漢詩人たちの支援による。

それに応えて、陳曼寿は『日本同人詩選』を編纂する。収録された詩人は概ね大阪・京都・大垣の漢詩壇に属し、地域の範囲においては広いとはいえない。これは陳曼寿の滞在期間中に刊行しようとしたため、やむを得ないものといえる。しかし、陳曼寿が実際に接した詩人たちとの交流の証でもあり、明治前期における日中の文化交流を知る上で必要な資料となっている。

また、陳曼寿は凡例において、日本人が古詩を作るとき、平仄について曖昧な知識を持っていることを指摘した。それは漢詩人たちに古詩に対する認識を改めるきっかけとなった。江馬天江は明治十七年六月に古詩の平仄について『古詩声譜』を出版している。これは自ら選んだ古詩に平仄を示し、具体的に古詩の平仄の規則を示したものである。江馬は序文において、陳曼寿の指摘によって古詩の平仄についての疑問が解けたことを記しており、陳曼寿の詩論の影響を見ることができる。また、ほぼ同時期の明治十六年三月に森槐南は、王漁洋が著し、翁方綱が補訂をした『古詩平仄論』を翻刻している。あるいは陳曼寿の指摘を耳にしたことによる出版かもしれない。

そして、陳曼寿にとっては、三年に及ぶ日本滞在の記念であり、自分を支えてくれた人々への最後の挨拶となったのである。

附　陳曼寿と土屋弘

多くの人々に支えられた陳曼寿にとって、最も深い関係を持ったのは土屋弘であろう。それは日本の漢詩人の詩文集の内、土屋の詩文集『晩晴楼詩鈔』『晩晴楼文鈔』に最も多く交流の跡が見られることによる。その例として、まず土屋が明治十四年に生まれて半年の娘を失ったとき、陳曼寿へ送った手紙を示す。(12)

陳曼寿に与う

三月中、弟は一女を挙ぐ。鍾愛、啻だに掌珠のみならず。而れども頃日、之を喪ふ。憶ふに往日、老台、弊廬を過る。女は婢に抱かれ、老台に謁す。老台、取りて之を膝上に置き、愛撫して已まず。状、猶ほ目に在り。而今、則ち亡し。老台、且に此の割腸の情を察せん。聊か詩を賦し、以て餘哀を洩らす。詩に曰く、

汝父兮汝母兮　汝が父　汝が母
説着汝輙催愁　汝を説着くに輙ち愁ひを催す
奈此中腸如断　此の中腸の断たるるが如きを奈せん
奈此漲乳欲流　此の漲乳の流れんとするを奈せん
感夷甫子情鍾　夷甫の子の情鍾まるに感じ
怪東門於不憂　東門の憂えざるを怪しむ
笑容藹藹在目　笑容藹藹として目に在り
悲由衷莫暫休　悲しみは衷由りして暫くも休む莫し
一読して幸はくば痛正を賜はらんことを。不宣。十月念三日。

「夷甫子情鍾」は『晋書』巻四十三にある王衍の故事を踏まえる。東晋の王衍が子供を失うと、山簡がその悲しみは過度ではないかと問うと、王衍は「優れた人は思いにとらわれず、くだらない者は思いを抱くまでにも及ばない。様々な思いが集まるのは他でもない、我々のような者である」と答えた。また、「東門於不憂」は『列子』力命、『戦国策』秦策にある東門呉の故事を踏まえる。戦国時代、魏の東門呉が子供を失っても悲しむことはなかった。妻が「あなたは世の中で一番あの子を愛していたのに、どうして悲しむことがないのですか」と尋ねた。東門呉は「子供がいなかったときには、悲しむことはなかった。今、子供が死んで、子供がいなかったときと同じこととなったから、何を悲しむことがあろうか」と答えた。ともに子供を失ったときの反応を基としているが、土屋は深い悲しみにある王衍に同情し、悲しむことのない東門呉を訝しむ。土屋の子供を失った悲しみを表現した対句である。陳曼寿に「餘哀を洩ら」して、子供を失い、悲しむ父親という姿を見せることができるのは、両者の関係が深いことによる。これには、陳曼寿が「余、四子一女有り（陳曼寿「乃亨翁歌」の自注）」であることも、土屋が思いを打ち明けられた理由であろう。

この思いに陳曼寿は次の詩を贈って、追悼の意を表す。(13)

光緒七年歳末次辛巳の孟冬、襄城の客館に於いて、弘毅先生の手書を得。喪女の痛有るを知りて、此を賦して之を唁ふ

上番信宿高斎日　上番　高斎に信宿する日

曾抱嬌嬰相戯娯　曾て嬌嬰を抱きて相戯娯す
夜半呱呱声在耳　夜半の呱呱　声　耳に在り
書来已失掌中珠　書　来りて　已に掌中の珠を失ふ

紅塵小謫半年強　紅塵は小謫す　半年強
鍾愛知君欲断腸　鍾愛　君が断腸せんとするを知る
一霎曇花開又落　一霎の曇花　開き又た落つ
人間難覓返魂香　人間覓め難し　返魂香

第一首では、「初めて土屋先生の家に二晩泊めてもらったとき、かわいい幼子を抱いて楽しく遊んだ。その夜中に泣いていた声は今でも耳にある。しかし、先生からの手紙が届いて、もう掌中の珠のように慈しんでいた、あの幼子が亡くなっていたとは」と、最初で最後の出会いを思い起こしている。第二首では、「この俗世に半年強という間、かりそめに身を寄せた幼子。先生の深い愛情を思うと、身を切られるような悲しみにあることが解る。優曇華がほんの短い間に咲き、散ってゆくように、幼子もごく短い命を終えた。だが、かつて漢の武帝が、愛する李夫人の魂を現世に返すため焚いたという返魂香は、この世の中では求め難い」と、永久の別れとなった土屋の悲しみに共鳴している。

また、陳曼寿への追悼の詩は、管見では土屋の作のみである。[14]

聞陳曼寿病歿賦之遥奠　陳曼寿の病歿を聞き、之を賦して遥奠す

仙山一去路難通　仙山　一たび去れば　路　通じ難く
往事回頭総作空　往事　頭を回らすに　総て空と作す
三載訂交塵夢外　三載　交を訂む　塵夢の外
百篇擒藻笑談中　百篇　藻を擒る　笑談の中
騎鯨太白身安在　鯨に騎る太白　身　安くにか在る
化鶴令威跡已同　鶴と化す令威　跡　已に同じ
別有天涯吟社友　別に天涯　吟社の友有り
游魂応到大瀛東　游魂　応に大瀛の東に到るべし

「遥奠」は遠い場所から追悼をすること。詩は「別世界に一度去ってしまえば、そこへ行く路は通り難いものとなり、かつての交わりを思い起こしても、すべて空しい。三年の間、陳曼寿と俗世を離れた文雅の世界に交わりを結び、陳曼寿は楽しく語らいあう内に美しい言葉を我が物として、多くの詩を作られた。鯨に乗って月を取ろうとした李白のようなあなたはどこにおられるのか。仙術を学んで鶴となった丁令維のように、仙山に旅立ったあなたは、その跡を尋ね難いのも同じである。だが、祖国と同じように、この地の果てにある日本にも、詩を交わした友である私がいる。あなたのふわふわとさまよう魂は、きっと大海原の東にいる私のところへも来るでしょう」と、追悼の思いを綴っている。

わずか三年という間ではあったが、陳曼寿と土屋弘は文雅の友としてお互いを認め合っていたに違いない。

注1　王宝平『清代中日学術交流の研究』（汲古書院、二〇〇五年二月）。第一部第一章「明治前期に来日した中国文人考」（十五～五六ページ）。蔡

毅「陳曼寿と『日本同人詩選』――中国人が編纂した最初の日本漢詩集――」(『國語國文』第七二巻第三号、二〇〇三年三月、七〇五～七二五ページ)。陳捷『明治前期日中学術交流の研究』(汲古書院、二〇〇三年二月)、第二部第二章「清国公使館と日本人との親交」(一五二～一五三ページ)。特に蔡毅論文より多くの裨益を受けた。ここに記して謝意を表す。

2 『清代中日学術交流の研究』三二～三三ページ。

3 『新文詩』は二松学舎大学附属図書館所蔵本を用いた。

4 「余曩在西京、邂逅曼寿。一見、偉其為人。今読此篇、詳其平生閲歴、益愛其人、而深慨其不遇也」「半生閲歴、了了在目。詩人之窮、千古如一。余輩亦不得不同病、相憐也」

5 朝日新聞・読売新聞の記事は「聞蔵Ⅱビジュアル」「ヨミダス歴史館」に拠った。

6 二松学舎大学日本漢文教育研究推進室所蔵本を用いた。

・明治十三年四月二十三日条　舎主語余曰「有支那客。在別楼。曰陳曼寿。曰衛鋳生。余乃見之、原田西疇在座、為介。鋳生数月前在東京、数見。一別以為天涯、今日復邂逅。実為奇縁。曼寿探袖中、出岸吟香自上海寄余書、且曰「弟於葉松石家、読蓮塘唱和。早記名」亦奇遇也。曼寿為人、清癯沈静、非尋常漫遊士也。

・同月二十六日条　午後、会飲宮川坊不老亭。(中略)邀清人陳・衛二子。(後略)

・同月二十七日条　見陳・衛二子。衛病酲不能起。陳方俛焉書細字。余不欲煩之。乃去。西疇来曰「将刊陳氏詩抄。余為慫慂之」

・同月二十九日条　早起発京。留書、別陳・衛二氏及西疇。(後略)

7 明治十三年五月五日条『朝野新聞　縮刷版』11(ぺりかん社、一九八二年三月)による。

8 原文は次のとおりである。

・友人岸田吟香滞在支那上海、寄書于春翁中有「陳・蔡数子詩曰『陳氏東游在近。故先寄示之』吁天涯比隣、文士往来亦是昭代之化。其事可喜。其人可企望焉」(陳曼寿「別滬上諸同人」)

・陳氏来遊已定。若使蔡氏亦継至、則亦添一段佳話。(蔡寵九「送陳曼寿游日本」)

9 近者在西京、邂逅陳子于逆旅。雖匆卒間、深服其為人、而其言謙抑如此。使人慚汗湿背。

10 『鶚笑新誌』については、岐阜女子大学の中島博康氏のご教示に与った。原文は次のとおりである。架蔵本を用いた。

11 一、日本為同文之国。都人士秉経酌雅、文采煥然。余游東土、以文字訂交者、不乏其人。所惜足跡有限、安得挙一国之詩与人偏観而尽識。故是編専就所相識之人、加意蒐輯。間有神交諸君筆札時通者、亦為編入。以作他日相見之券。

一、近来諸家選本日出、名作已美、不勝収。然於声調格律、即近体中亦有錯誤、而古体則尤甚者。是編所選、皆合前人矩矱、縦有微瑕、不揣冒昧、均為一々酌正。

一、贈答倡和諸什、半属酬応、似可不列於選。是編択其佳者、不忍割愛。以見一時詩筒来往之盛。

一、編中所登、僅有見一二首者。因其人雖曽識面、而未見其全稿。或於詩冊上録得之、或於友人処借抄之。欲存其姓氏、詩之精粗、姑置勿論。

一、是編不論爵秩年歯、以相識之先後為序。逐時登選授梓、嗣刻続出。

一、是編所輯之詩、悉係諸君手抄見贈居多、間有於他処録得者。筆墨余間匆匆編次、魯魚亥豕有所不免。尚望諸君閲後函致更改。

壬午春日鴛湖詩老陳曼寿識

12 『晩晴楼文鈔』下巻所収(「近代デジタルライブラリー」)に拠る。

与陳曼寿

三月中、弟挙一女。鍾愛不啻掌珠。而頃日喪之。憶往日老台過弊廬。女抱於婢、謁老台。老台取置之膝上、愛撫不已。状猶在目。而今則亡矣。老台且察此割腸之情。聊賦詩、以洩餘哀。詩曰汝父兮汝母兮、説着汝輙催愁。奈此中腸如断、奈此漲乳欲流。感夷甫子情鍾、怪東門於不憂。笑容藹藹在目、悲由衷莫暫休。一読幸賜痛止。不宣。十月念三日。

13 『追思編』は架蔵本を用いた。

14 『晩晴楼詩鈔』巻二(「近代デジタルライブラリー」)に拠る。

【付記】本稿は、第三十二回和漢比較文学会大会（平成二十五年九月二十九日、於早稲田大学）で「陳曼寿『日本同人詩選』について」と題しておこなった口頭発表に基づく。司会の合山林太郎氏、ご指摘をいただいた福井辰彦氏に感謝を申し上げる。また、資料のご協力をいただいた、えびな書店、中島博康氏にも御礼を申し上げる。

（ひの・としひこ　本学アジア太平洋研究センター客員研究員）

『日本同人詩選』作者一覧

	作者名（生没年）	注　　記（【　】内は日野の補注）	掲載詩数＊
巻一			
1	江馬欽(1825-1901)	字正人。号天江。京都人。著有退享園詩稿。【『味梅華館詩鈔』跋】	37(5)
2	谷鉄臣(1822-1905)	字百錬。号太湖。又号如意山人。近江人。	7(1)
3	小野長愿(1814-1910)	字侗翁。号湖山。又号狂々先生。近江人。刻有蓮塘倡和集、湖山近稿、湖山近稿続集、湖山消間集、鄭絵餘意諸種、行世。【『味梅華館詩鈔』序】	26(0)
4	神山述(1824-1889)	字古翁。号鳳陽。又号三野。京都人。	8(0)
5	原田隆(ママ)	字子隆。号西疇。浪華人。著有鴨涯吟草。工鉄筆。【『味梅華館詩鈔』序他、『味梅華館詩鈔』編輯・出版】	4(1)
6	伊勢華（1822-1886）	字士韡。号小松(ママ)。山口県人。著有我亦愛吾池詩草。【『味梅華館詩鈔』題詩】	29(1)
7	宮原龍(1806-1885)	字士淵。号易安。又号潜叟。京都人。	4(0)
8	村松勤	字子業。号逸漁。京都人。	2(0)
9	九富女子鼎	号小洲。讃岐人。著有調鸚館吟草。工絵事。	7(3)
10	鶴田朗	字申明。号松蘿。長崎人。	5(0)
11	山中猷(1822-1885)	字静逸。号月橋。又号信天翁。三河人。	11(0)
12	浅井龍(1842-1907)	字瘻橘。号柳塘。又号小白山人。京都人。工山水。	1(0)
13	江馬肇	字太初。号梅窓。京都人。	1(1)
14	小川僧泰(1857-1916)	字士尚。号果斎。美濃人。	4(1)
15	鈴木寿(1825-1891)	字子康。号百年。又号大椿翁。京都人。工絵事。	6(0)
巻二			
16	神田信醇(1854-1918)	字子醇。号香巌。京都人。刻有夕陽紅半楼詩稿。	38(6)
17	頼復(1823-1889)	字士剛。号支峰。安藝人。	11(0)
18	村松発	字中節。号墨海。京都人。	4(0)
19	浅野女子寿	号松江。美濃人。工絵事。	1(0)
20	市村謙(1842-1899)	字士牧。号水香。又号錦洞仙客。摂津人。著有錦洞居小稿。【『味梅華館詩鈔』跋】	24(1)
21	村田叔(1831-1912)	字蘭雪。号香谷。京都人。工山水。	27(1)
22	戸田光(1851-1908)	字士敬。号葆逸。美濃人。工絵事。著有問鶴園詩稿。	3(1)
23	福原亮(1827-1913)	字公亮。号周峰。又号嬾真子。長門人。著有香草吟廬詩鈔。	17(2)
24	小林卓蔵(1831-1916)	号卓斎。京都人。工鉄筆。	14(1)
25	片山勤	字士業。号精堂。摂津人。	10(0)
巻三			
26	岡本迪(1810-1897)	字吉甫。号黄石。淡海人。刻有黄石斎詩集、行世。	33(0)
27	林英(1828-1896)	字俊仲。号雙橋。京都人。原籍淡州。	9(0)
28	内村義城	字正路。号青山。東京人。	1(1)
29	大沼厚(1818-1891)	字子寿。号枕山。東京人。	11(0)
30	森熊(1843-1921)	字夢吉。号琴石。又号鉄橋道人。摂津人。工山水。	1(0)
31	山田鈍(1844-1913)	字永年。号子静。京都人。刻有古硯堂小稿、皆山楼吟草、行世。	18(0)
32	水越成章(1849-1933)	字裁之。号耕南。播磨姫路人。	17(0)

33	白川女史幸(1856-1890)	号琴水。飛騨高山人。著有鴨西寓草。工絵事。	8(0)
34	森魯直(1819-1889)	字希黄。号春濤。尾張人。編有新文詩、新文詩別集、旧雨詩抄(ママ)、東海倡和集各種、行世。	20(0)
35	相良常長	字子義。号錦谷。薩摩人。	5(0)
36	菊池純(1819-1891)	字士顕。号三渓。京都人。	12(0)
37	高木保	字保吉。号如石。美濃人。	3(0)
38	宮原孝	字政叔。号宕陽。洛陽人。	3(2)

巻四

39	土屋弘(1841-1926)	字伯毅。号鳳洲。和泉人。著有晩晴楼詩文集。	28(1)
40	藤澤恒(1842-1920)	字君成。号南岳。讃岐高松人。寓大坂。	11(0)
41	瀧野女子楽	号雨香。浪華人。工画蘭。	3(0)
42	波部敬	字主一。号竹城。丹波人。住浪華。	1(0)
43	小山朝弘(1827-1891)	字士遠。号春山。東京人。刻有官暇勝遊小稿。	13(1)
44	田部密(1838-1910)	字洗蔵。号苔園。近江人。寓浪華。	2(1)
45	有馬純心	字成美。号虔堂。又号海翁。越前人。	9(1)
46	大雅堂定亮(1838?-1910)	字百禄。号禄明道士。京都人。	2(1)
47	河野通胤	字大年。号春飄。淡路人。	7(0)
48	関根柔(1841-1890)	字録三郎。号痴堂。愛知県人。刻有東京新詠。行世。	31(0)
49	小原正棟	字陸夫。号竹香。美作人。	4(0)
50	石橋僧教(1846?-1914)	号雲来。播州人。住浪華。有雲来吟交詩刻。	10(0)
51	杉山千和(1821-1899)	字孝夫。美濃人。	6(2)
52	石川足(1847-1927)	字子淵。号柳城。尾張人。	3(1)
53	野村煥(1827-1899)	字士章。号藤陰。美濃人。	7(1)
54	山川賢	字士勝。号雪鴻。美濃人。	4(0)
55	後藤束	号聴濤。美濃人。	1(0)
56	中島靖	字香国。号蘆洲。美濃人。著有爽気楼詩鈔。	3(1)
57	牧野鉄	字九良。号交翠。岐阜人。	2(0)
58	清水粲蔵	号任所。美濃人。	2(1)
59	関口章	字伯斐。号子裁。但馬人。	3(0)
60	矢野精	号栗所。美濃人。	2(0)
61	波多野女史元子(1863-1944)	号花涯。浪華人。	1(0)
62	高木展為	字無為。号秋水。近江人。	2(0)

＊(　)内は、陳曼寿に関係する詩題の数。

掲載詩数順（10位まで。各巻の最初に配置されている者は、作者名に下線を引き、陳曼寿の詩集『味梅華館詩鈔』に関わる者は作者名を太字にした。）

1	神田信醇	字子醇。号香巖。京都人。刻有夕陽紅半楼詩稿。	38
2	**江馬欽**	字正人。号天江。京都人。著有退享園詩稿。【『味梅華館詩鈔』跋】	37
3	岡本迪	字吉甫。号黄石。淡海人。刻有黄石斎詩集、行世。	33
4	関根柔	字録三郎。号痴堂。愛知県人。刻有東京新詠。行世。	31
5	**伊勢華**	字士韡。号小松(ママ)。山口県人。著有我亦愛吾池詩草。【『味梅華館詩鈔』題詩】	29

6	**土屋弘**	字伯毅。号鳳洲。和泉人。著有晩晴楼詩文集。	28
7	村田叔	字蘭雪。号香谷。京都人。工山水。	27
8	**小野長愿**	字侗翁。号湖山。又号狂々先生。近江人。刻有蓮塘倡和集、湖山近稿、湖山近稿続集、湖山消間集、鄭絵餘意諸種、行世。【『味梅華館詩鈔』序】	26
9	**市村謙**	字士牧。号水香。又号錦洞仙客。摂津人。著有錦洞居小稿。【『味梅華館詩鈔』跋】	24
10	森魯直	字希黄。号春濤。尾張人。編有新文詩、新文詩別集、旧雨詩抄、東海倡和集各種、行世。	20

付、京都・大阪の漢詩壇の人々

・『雲来唫交詩』第一～第三集（石橋雲来編、明治十三～十四年刊）に名前が見える者。　岡本黄石・河野春飄・山中静逸・江馬天江・神山鳳陽・小原竹香・谷鉄臣・藤澤南岳・山田永年・相良錦谷・福原周峰・大沼枕山・森春濤・宮原易安・菊池三渓・田部苔園・市村水香・小林卓斎・片山精堂・森琴石・波部竹城・瀧野雨香・小野湖山・頼支峰・陳曼寿・伊勢小淞・神田香巌・林雙橋・村田香谷・浅井柳塘・鈴木百年（初出順、陳曼寿を含め 31 名。全て『日本同人詩選』に採録されている。）

美濃・尾張の漢詩壇の人々

・『鶚笑新誌』第一～第十一集（社長：野村煥（藤陰）、編集長：戸田鼎耳（葆逸）明治十四年～十五年刊）に名前が見える者。　野村藤陰・杉山千和・高木如石・中島蘆洲・矢野栗所・小川果斎・関口伯斐・後藤聴濤・牧野交翠・戸田葆逸・小林卓斎・石川柳城（柳塘）・清水任所・原田西疇・陳曼寿・頼支峰・神山鳳陽・小野湖山・山中静逸・高木如石・森春濤・伊勢小淞（初出順、陳曼寿を含め 22 名。全て『日本同人詩選』に採録されている。）